

ネパール山間医療の過去と現在

—村人と生きる，パルパ郡タンセン病院—

中 村 友 香*

タンセンはネパール西部パルパ郡の郡庁所在地で，首都カトマンズより 300 キロ，車で約 8 時間のところにある。15 世紀以降パルパ・セーナ王国の都として栄えたタンセンは山の上の，人口約 3 万人 [National Population and Housing Census 2011] の町である。山の斜面に敷かれた石畳の細い道路は迷路のように伸び，名産ダカ織の店などたくさん種類の店が並ぶ。そんな町の外れの丘に建っているのが United Mission Hospital Tansen（以下タンセン病院）である。町外れといえど，そこは寂しい場所ではない。病院の東には遙か遠くまでいくつもの山々が連なり美しく，町に面した西と南側には，病院に来院患者や家族がくつろぐ軽食屋，遠方の患者や付き添いの村人たちが宿泊するホテル，薬局，生活雑貨や駄菓子を売る露店が立ち並び賑わっている。私は，この病院でかつて医師として働いた故岩村昇医師の夫人である史子氏，養子であるネパール人女性のマヤ氏らと共にタンセンの町を訪れた。

タンセン病院設立

タンセン病院は 1959 年，医療奉仕と伝道を目的としてネパール合同ミッション（The

United Mission to Nepal¹⁾）によって開設され，パルパ郡及びその周辺地域に近代医療を紹介，普及した。当時ネパール人のキリスト教改宗は違法とされる状況下での設立であった。²⁾ 院長はアメリカ人医師 Dr. フレデリックスで，そのほかにイギリス人医師，そして 1962 年には岩村昇氏が加わった。1960 年代初期，病院従事者は 28 名，ベッド数は 46 床，外来患者は 1 日約 300 人であった。当時，レントゲン撮影や開腹手術が可能で，入院設備のある近代総合病院は中西部ネパール山間地帯に住む人口 200 万人に対してタンセン病院のみであった。1960 年代，近代医療サービスへアクセス可能であったのは人口 960 万人のうち 7% 程度であったといわれるネパールにおいて，タンセン病院は大きな役割を担うこととなった。多くの患者は 5～6 日，中には 20 日の道のりを歩いて，もしくは親族や村人に担がれてこの病院へやって来たという。

結核と戦う岩村医師

日本キリスト教海外医療協力会から送り出された岩村昇医師は公衆衛生医としてタンセン病院に着任した。当時，タンセン病院の外

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

来内科患者では、結核やハンセン病、マラリアやコレラ、細菌性赤痢やアメーバ赤痢が多く、入院患者の80%近くが感染症患者であった。こうした中で岩村氏が精力的に取り組んだことのひとつは村落での結核検診であった。岩村氏は外来の結核患者のほとんどが咯血してからやってくる様子を見て、患者が病院に来るのを待っていては手遅れであると考えた。そして、赴任初期には小型のレントゲン機器を背負って村々を行き来し、日本式の結核対策を導入した。1966年ごろから在宅治療中心の簡易的で安価な結核対策を、そして1968年以降、村の伝統的な民間治療師の活動に協力する形で患者を見つけ治療を試みる現地方式の対策を立てようとした。

タンセンの昔と今

母親を結核で亡くし、自らも結核乳児であったマヤ氏と岩村夫妻が親子になって、50年以上の月日がたった。史子氏とマヤ氏は「当時は本当に、丘の上にぽつんと病院がある感じで、周りには何もなかったの。町の方には立派な庁舎があったけれど、病院の近くには建物もなくて、裏の丘は植林もされていなくて、はげ山だったわ。じゃがいもの大きさは相変わらず小さいままだけれど、町はとても大きくなった」と当時の町の様子を口々に振り返る。1960年代、首都カトマンズよりタンセンへ行きつくのは容易ではなく、不定期な国内線を運よく乗り継ぐことができたとしても、そのあと車で3、4時間、そし



写真1 人々がかつて歩いて越えた山々



写真2 現在のタンセンの町

て1日の徒歩によって行きつくことのできる、山の中の村であった。不定期便を捕まえられなければ、地方都市ボカラから125キロ、約5日間の徒歩の旅である。米は高級品でトウモロコシやヒエが主食、病院の明かりが、西ネパール山間地域唯一の電気であった。現在では、冒頭にも述べたように、カトマンズや地方都市ボカラからタンセンまで車道がある。病院の前には病院の発展とともに広がったバザールがある。3Gの携帯電話や

1) 医療奉仕を目的に、十数カ国のキリスト教団体が合同して作られた。
2) 宣教団の入国、活動は1951年より認められていた。

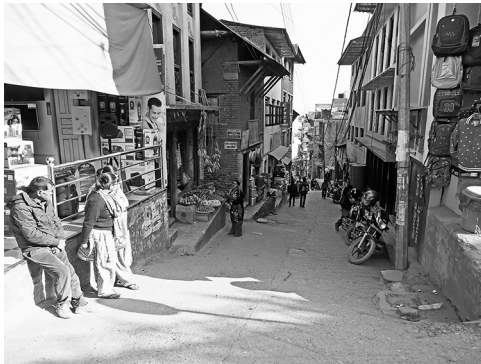


写真 3 さまざまな店が立ち並ぶ



写真 4 病院外観

インターネットが使える。外国人観光客も訪れるようになり、朝食にトーストとバター、マンゴージュースが出る大規模なホテルができた。夜になれば家々の明かりがまぶしく、昼間よりもかえって多くの人が住んでいることを実感させるのである。

変わり続けるタンセン病院

かつて岩村氏が結核と戦ったタンセン周辺の様子は大きく変わっても、タンセン病院は近隣地域から頼りにされる大規模病院である。パルパ郡のみならず、80キロ以上離れたインド国境付近からも1日計300人近くの患者が訪れる。中西部ネパール僻地の村人たちの多くは今でも「近くで治らない病気になったらまずタンセンに行く」と言う。岩村氏が働いた当時のように、今でもタンセン病院は、貧困や地理的な要因によって病院へのアクセスが困難な、ネパール山間地域の膨大な人口の健康を支えている。それに加えてタンセン病院は、近年増加するニーズに寄りそう方法も模索し続けている。2012年より院



写真 5 病院待合室

内に設立された糖尿病クリニックはそのひとつである。ネパールにおける医療施設や医療保健プロジェクトは多くの海外援助団体に支えられているが、しばしば感染症対策や栄養改善、母子保健等が急務とされ、非感染性疾病対策は、新しすぎる問題、あるいはネパールがまだ到達していない問題として扱われることさえある。しかしながら、2015年の調査によるとネパールの糖尿病罹患率は人口の約8%、糖尿病関連死は死因の3%を占めている。かつて岩村氏が予防対策に奔走した結核による死も2012年の統計では死因の3%

となっている。両者を単純に比較することはできないが、糖尿病がネパールにおいても増加していると考えても論理の飛躍ではないだろう。タンセン病院でも1日の外来患者約300人のうち約2～3人が2型糖尿病と診断されるという。タンセン病院はこうした状況に対応し、糖尿病のための食事改善や定期的な血液検査、視力検査などの管理や教育を専門とする医療従事者を院内に置くようになった。

「糖尿病が悪化しても、ネパールの村に住む人々が人口透析や移植を受けるのは容易なことではありません。特に貧困層にとってそうした治療を継続して行なうのは非常に高額で、手続きも煩雑です。首都まで行って大きな病院で透析を受けるというのも時には必要なことですが、できるだけ近くの病院で、病気を管理し改善していけるのはとても大切なことです。」タンセン病院で働くネパール人医師は言う。

村人と生きる、とはなんなのか

タンセン病院は、新しい疾病と捉えられる2型糖尿病の患者や、一方で山間僻地に取り残された無医村地帯の村人たちなど、多様なネパールの医療状況に対し、患者たちにとってできるだけ無理のない良い医療を提供しようとしてきた。岩村氏は、無償で何日も知り合いでもない患者を背負い山道を歩く理由を、日当のためではなく「サンガイジウナコラギ（共に生きるためだ）」と答えたネパール人青年の言葉をスローガンに、村人たちの知恵を学ぶことを喜び、日本式の活動ではなく村人と共に活動を行なう道を模索してきた。



写真6 院内教会

ネパールの医療保健の発展は、こうした岩村氏やタンセン病院をはじめ、キリスト教の信仰と伝道の下での医療奉仕に支えられてきた。しかし一方でこうした活動を受け入れるネパール社会に葛藤がないわけではない。私が、キリスト教団体が支援する公衆衛生活動に同行していた時のことだ。ネパール人キリスト教徒のスタッフが突然怒鳴り声をあげた。「ヒンドゥー教徒はいつまでも貧しく病気になる。なぜ神を信じない。祈らないからあなたは治らない。」見ると怒鳴られた女性はおびえ涙ぐんでいる。村人たちに訳を聞くと、女性は体調不良が治らず村の民間治療師のところへ行ったこと、そうした行動がキリスト教系支援団体の中で良く思われていないことを教えてくれた。そして、キリスト教系支援団体には大変感謝しているが、貧しい村で大量の資金を使って、ネパール人キリスト教徒を「作ろうとしている」のではないかと意見を交わし始めた。厚い信仰心の下で、異

教徒のためにも祈り、働くキリスト教徒医療従事者たちに私は出会ってきた。しかしながら、しばしば彼らの信仰に関する熱心な口調や医療効果と結び付けた語り口に、戸惑いや反感、不安をもつヒンドゥー教徒たちがいるのも確かである。

こうしたことが頭をよぎるために、タンセン病院や岩村昇氏の活動を、伝道として行なわれた素晴らしい医療奉仕であるとして考えることに躊躇してしまう。この小さなエピソードからみても、医療援助と伝道は、医療的貢献という視点からのみでは語れない、複雑な状況をネパールにもたらしているようにみえるからだ。しかしそれでも、上記に述べてきたように、タンセン病院と岩村氏が目指した「サンガイジウネ（共に生きる）」術は、ネパールに関わる者、また援助や伝道の分野

で活動する多くの者にとってひとつの道しるべとなってきただろう。

タンセン病院でキリスト教徒たちの祈りに耳を傾けながら、なんとなく居心地の悪い思いをする。それは私自身が、他の神を信じる者たちと共にどのように生きるべきかという問いの答えをまだ知らないからかもしれない。それでも、タンセンで考えたことを胸に、人はどのように共に生きられるのか、自分自身の答えを探すことを辞めないでいたいと思うのであった。

引用文献

National Population and Housing Census. 2011. (Village Development Committee/Municipality) Volume02. <http://cbs.gov.np/image/data/Population/VDC-Municipality%20in%20detail/VDC_Municipality.pdf>

海は道、空は地図

中野真備*

「漂海民」バジューマレーシア・サバ州や、インドネシア島嶼部を中心に拡散居住し、国籍にとらわれず、独自の言語を操り、ときにオーストラリアや中国まで海を渡った、極めて移動性の高い人びとーの多くは現在、海域世界の社会・政治・経済的变化を受け、かつ

では家船にのって海上生活をしていたが、陸地あるいは海上に杭上集落を建てるなど、定住化が進んでいる。私が訪れた、インドネシア共和国中部スラウェシ州バンガイ諸島県バンガイ島・ペレン島および北マルク州タリアブ島県タリアブ島・リンボ島は、こうした

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科